

≪特集≫春日直樹先生退官記念エッセイ集

序

『くにたち人類学研究』編集部

2019年3月をもって、一橋大学社会人類学研究室から春日直樹先生が退官されることとなった。春日先生の着任が決定し、岡崎彰先生から大学院生のメーリングリスト宛に送られたメールの文面には、「あまりに素晴らしいニュースで夢ではないかといぶかる人もいますが、本当の話です」と書かれてあり、驚きと期待を院生同士で共有したのをよく覚えている。毎週月曜日の春日ゼミでは、*Big Men and Great Men: Personifications of Power in Melanesia* (M. Strathern & M. Gaudrier eds. 1991)や、*Deleuzian Intersections: Science, Technology, Anthropology* (C.B. Jensen & K. Rödje eds. 2009)など、メラネシアの民族誌から最新の議論まで決して楽ではない、というよりかなり難解な文献の購読を行ってきた。おそらく多くの院生（特に修士課程）は時においてけぼりになったような感覚を持ったかもしれないが、それでも合同ゼミでは教員同士の議論を目の当たりにするなど、贅沢な耳学問を経験することができた。この「おいてけぼり」という感覚はまさに、春日先生の最終講義の冒頭で大杉高司先生が述べたように、春日先生を一言で表すならばそれは「変態、あるいはメタモルフォーゼ」であるという点、つまり、止まることなく常に変身し



図1：満員となる会場（撮影：藤井真一）



図2：最終講義をする様子（撮影：藤井真一）

つづける春日先生の研究に対する姿勢に起因するものなのかもしれない。

着任から9年。2019年3月30日、国立駅の大学通りが桜で満開の中、一橋大学にて「呪術と無限、分裂症とゼロ」という題目で最終講義が行われた。会場は立ち見が出るほどの盛況であった。2010年に一橋大学に来てからの関係者のみならず、1996年から教授を務めていた大阪大学時代の関係者も集まった。講義の後は、東京大学の箭内匡教授と慶應義塾大学

の北中淳子教授から、発表に対するコメントをいただいた。またその後、オーディエンスの方からも思い出話の混じるコメントや、発表内容に対する質問が投げかけられた。その後の食事会は、「いろんな人と話したいから、堅苦しいものではなくカジュアルな立食形式が良い」という春日先生らしい希望から、西キャンパスの職員集会場で行われた。準備段階から非常に多くの関係者の協力を受け、無事に最終講義と食事会を終えることができた。この場を借りて深謝したい。



図 3：食事会の様子（撮影：藤井真一）

本編集部では退官記念の特集を企画し、中川理氏、浜田明範氏、深田淳太郎氏にエッセイを書いていただいた。3人の内容はそれぞれ趣向の違うものとなっている。3人はともに春日先生とかかわりながら自身の研究を進めてきており、それぞれのエッセイにそれが反映されているように思う。春日先生の膨大な業績を読み解き、その変身の軌跡を追うこと、ましてや網羅的に解説することは適わないが、本特集を通じて、春日先生の著作群から見えてくる春日直樹像とは異なる側面を世に提示することができれば幸いである。